

植物油の 最近の動向

価格高騰の現状と
その背景について



※此方の資料は、日本植物油協会と油糧輸出入協議会の協力の下、みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社が、2022年9月～12月上旬現在で入手出来た公開情報に基づき行った整理や分析及び日本植物油協会による収集情報により作成。



一般社団法人

日本植物油協会

Japan Oilseed Processors Association



植物油の最近の動向

私たちの食生活と健康に不可欠な植物油が、
これまで比較的安価に手に入れることができていましたが、
世界的な植物油の高騰によって、日本国内でも値上がりが続いています。
そこで、なぜ植物油が値上がりをしているのか、
そこに紐づく背景を、植物油が使われている食品、
生活への重要性なども踏まえて、正しく理解していきましょう。





INDEX

- ① 日本における植物油の用途とその必要性 …… P.3-4
- ② 植物油を取り巻く現状
 - ・ 植物油の原料と輸入先 …… P.5
 - ・ 世界の植物油生産量 …… P.6
 - ・ 日本の原料依存状況 …… P.6
 - ・ 世界の原料油糧種子生産量 …… P.7
 - ・ 原料の価格動向 …… P.7
- ③ 植物油価格
 - ・ 国際的な食料価格の変化 …… P.8
 - ・ 国際的な植物油価格の変化 …… P.8
 - ・ 日本と世界の食用油価格推移 …… P.9
 - ・ 日本の消費者物価(食料、食用油他)推移 …… P.9
- ④ 植物油(食用油)を取り巻く需給構造の変化と価格変化
 - ・ 植物油の需給構造の変化 …… P.10
 - ・ 植物油原料調達先の確保及び多様化 …… P.10
 - ・ 菜種の生産量推移 …… P.11
 - ・ 菜種の需給推移 …… P.11
- ⑤ 植物油高騰の原因 ①～③
 - ・ 人口増加による需要の増加 …… P.12
 - ・ 生産労働人口の不足 …… P.12
 - ・ 異常気象による収穫量の減少(菜種) …… P.13
 - ・ 気候変動の見通し 温暖化と温室効果ガス排出量 …… P.13
 - ・ 急速な円安の進行 …… P.14
 - ・ 原料輸送費の上昇 …… P.14
 - ・ ウクライナ情勢による油脂原料供給不安 …… P.15
 - ・ 植物油とバイオマス燃料 …… P.16-17
 - ・ バイオマス燃料の消費量 …… P.17
- ⑥ 植物油の未来 …… P.18



植物油はどんな食品に提供され利用されているのでしょうか？

つぎの表は植物油が利用されている食品の例です。植物油は、炒める、揚げる、かける以外にも、練り込んだり、コーティングに利用されたり、多くの食品に利用されています。

容器入りのサラダ油 ケーキ レトルト食品 パン 缶詰 お菓子 唐揚げ マヨネーズ チョコレート
キャラメル ドーナツ ドレッシング 焼きそば ソース ホットケーキ クッキー 豆乳 コンビニおにぎり
ふりかけ ヨーグルト 粉末コーヒー アイスクリーム マーガリン ベビーミール 粉末スープ 練りからし
パスタソース 練りワサビ パン粉 クリーム 冷凍ピザ グラノラ お惣菜 シーチキン カレールー
焼き肉のたれ ポテトチップス ほか

植物油は健康維持に不可欠な存在です。

それが多くの食品に利用されている理由です。

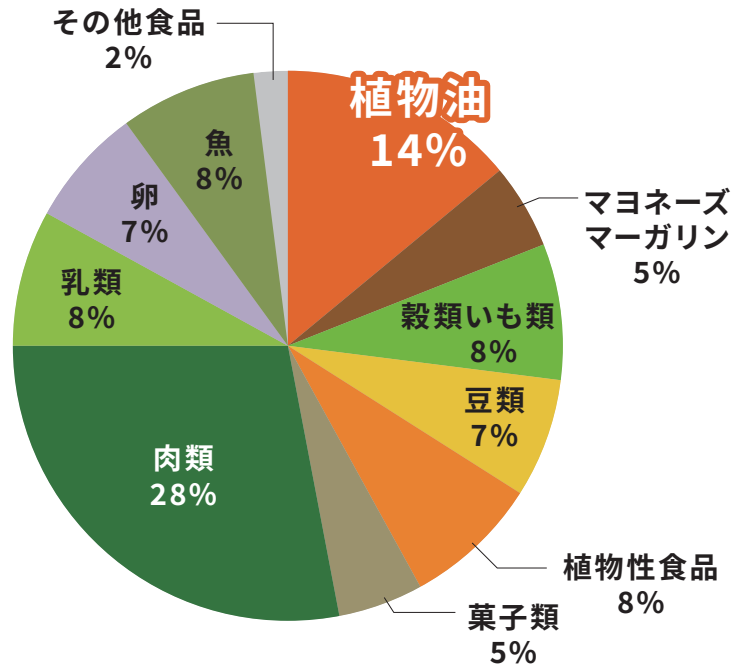
植物油は、美味しさの味覚、「甘味」「塩味」「酸味」「苦味」「うま味」に続く第6の味覚「脂肪味」があると言われています。そして、そのまま栄養素としての脂質でもあるという特徴を持つ食品です。

脂質は、たんぱく質、糖質、ビタミン、ミネラルと並ぶ5大栄養素の一つ。人体にとって、主要カロリー源となる、糖質、たんぱく質、脂質の3大栄養素でもあります。3大栄養成分に共通する特徴は、いずれも重要なエネルギー供給源である事です。中でも脂質は1g 当たり9kcal のエネルギー供給源です。脂質は、食事の消化・吸収、脂溶性ビタミンの吸収にも欠かせません。



脂質は、ほとんどの食品に含まれていますが、肉類から最も多く摂取され、次に植物油となっています。

食品群別脂質の摂取割合
(一人1日平均)

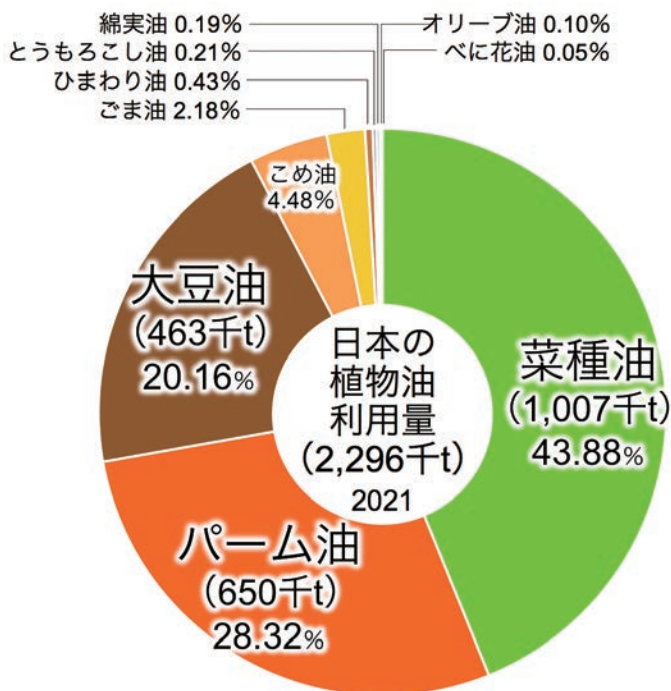


資料：厚生労働省「国民健康・栄養調査(令和元年)」

注：国民健康・栄養調査による1日に平均的に摂取される食品を基礎に、日本植物油協会で推計

1日に摂取される脂質のうち、植物油、バター、マーガリンなど、明らかに脂質(油脂)と分かる食品から摂取される脂質は20%程度で、80%は他の食品から摂取されています。これを「見えないあぶら」と称しています。脂質は取り過ぎても少な過ぎても好ましくありません。また、植物油は種類により栄養素が異なり、身体にとって様々な良い効果があります。

詳細は、日本植物油協会HP をご参照下さい。URL：<https://www.oil.or.jp>



- 日本で利用されている植物油は多様です。菜種油、パーム油、大豆油、こめ油、ごま油、ひまわり油、とうもろこし油(コーン油)、綿実油、オリーブ油、べに花油(サフラワー油)、えごま油、あまに油、ひまし油等が、食用や工業用として様々な利用されています。
- 特に菜種油、パーム油、大豆油の利用量が多く、全体の92.36%(約212万トン)を占めています。

(出所) 農林水産省、財務省、日本植物油協会 各種データより
みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

植物油を取り巻く現状

植物油の原料と輸入先

植物油は何処から来るのでしょうか？

日本で流通している植物油のほとんどは、世界中から、植物油の原料そのものを輸入して搾油したり、原油の状態
で輸入して、国内で精製する等して最終製品にしています。なお、米油は、国産原料では不足する分を原油の状態
で輸入して精製しています。

日本で親しまれている植物油

ひまわり油

ひまわりの種子が原料。
くせのない風味で、コレステロールへのゆるやかな作用が期待されるオレイン酸、酸化を防ぐといわれているビタミンEを豊富に含んでいます。原料の主産地はフランスなど。



オリーブオイル

生でも加熱でも。幅広い料理に活用
フルーティな香りが特徴で、生食でも加熱調理でもOK。老化の原因物質となる過酸化脂質を生成しにくくし、コレステロールへのゆるやかな作用が期待されるオレイン酸が豊富に含まれます。原料の主産地はスペインなど。



ごま油

ビタミンEなど抗酸化成分が豊富
芳醇な香りと豊かな風味が特徴。オレイン酸やリノール酸をバランスよく含み、抗酸化作用や老化予防効果が期待されるビタミンEやセサミンが豊富。加熱に強いので、幅広い料理に活用できます。原料の主産地はナイジェリアなど。



えごま油

あまに油同様、動脈硬化や血清脂質の改善が期待できるα-リノレン酸が豊富です。酸化しやすいので、サラダなど生食に向いています。原料の主産地は中国など。



あまに油

動脈硬化や血清脂質の改善が期待できるα-リノレン酸が豊富に含まれています。酸化しやすいので、加熱調理より生食向き。原料の主産地はベルギーなど。



米油

原料の米ぬかに含まれるγ-オリザノールは抗酸化作用や血中コレステロール低下が期待できます。ビタミンEが豊富で加熱に強く、オレイン酸やリノール酸も含まれます。原料の主産地は日本など。



パーム油

世界でもっとも多く生産されている植物油で、オレイン酸が豊富。チョコレートやマーガリンの原料になります。原料の主産地はマレーシアなど。



菜種油

酸化しにくく、加熱に強い植物油

油は熱で酸化しやすいのですが、菜種油は加熱に強いのが特徴です。風味もいいため、揚げものや炒めものなど、幅広い加熱調理に適しています。コレステロールへのゆるやかな作用が期待されるオレイン酸やα-リノレン酸などの必須脂肪酸を含みます。原料の主産地はカナダなど。



大豆油

ブレンドしてサラダ油などに

うまみとこくがあり、他の植物油とブレンドされてサラダ油や天ぷら油として利用されています。体内で生成できない必須脂肪酸で、コレステロール低下作用が期待されるリノール酸が豊富。動脈硬化の改善に役立つといわれているα-リノレン酸も含まれます。原料の主産地はアメリカなど。



コーン油

菜種油同様、加熱に強いのが特徴。風味がよく、抗酸化作用があるといわれるビタミンEや、コレステロール低下作用が期待されるリノール酸が豊富。原料の主産地はアメリカなど。



紅花油

紅花の種子が原料で、ビタミンEを多く含み、コレステロールにゆるやかに作用するといわれるオレイン酸も豊富。原料の主産地はアメリカなど。



綿実油

綿をとったあとの綿花の種子から作られる植物油。独特のこくと風味があります。ビタミンEやリノール酸が豊富に含まれます。原料の主産地はアメリカなど。

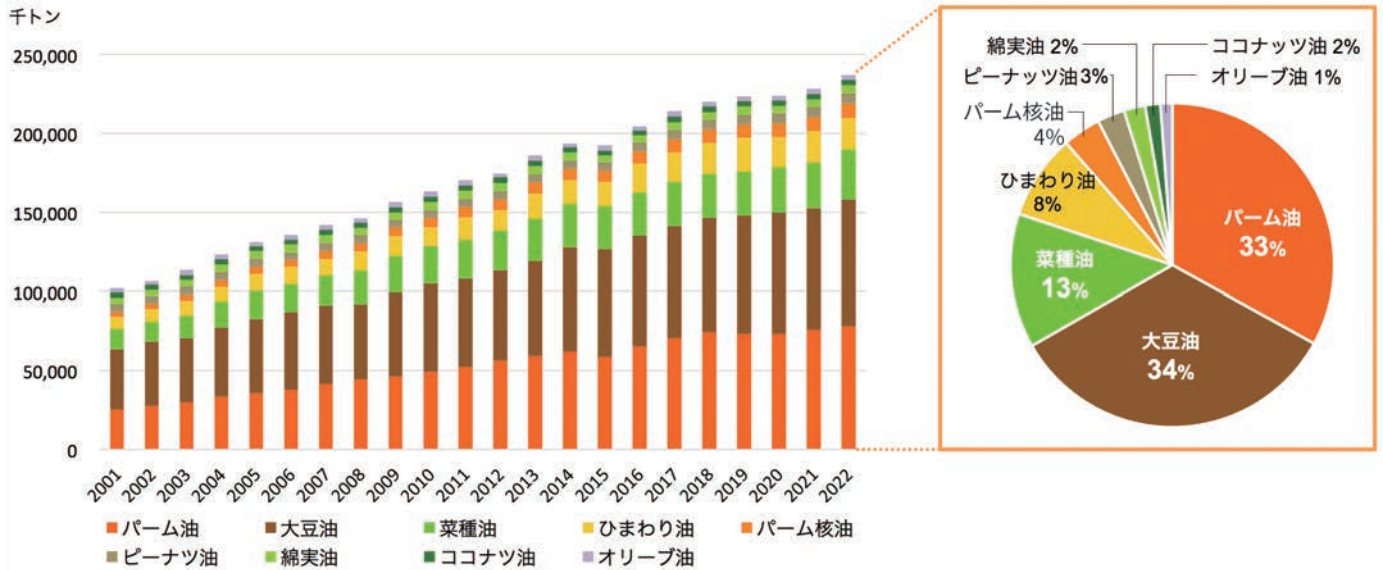


世界の植物油生産量

- 世界全体では、2001年以降植物油の生産量は年々増えています。米国農務省に依れば、2022/23年の主要な植物油の生産量については、約2億3千万トンに上ると推計されています。
- 植物油の内訳を確認すると、パーム油、大豆油の割合が大きく、次いで菜種油の生産量が多くなっています。

2001年以降の主要な植物油の生産量推移

植物油の種別生産比率
(2022年予測値)



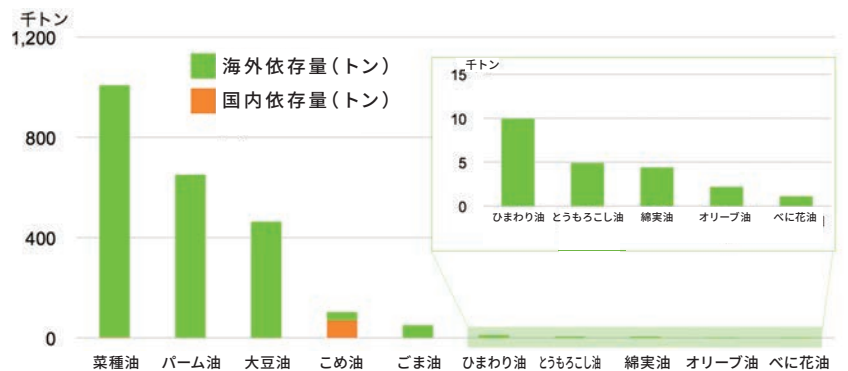
(出所) USDA, PSD Onlineより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成 横軸は市場年度

日本の原料依存状況

- 日本は、植物油の原料を殆ど海外からの輸入に依存しています。

日本で消費されている主な植物油の供給量と原料(2021年)

油の種類	原料
菜種油	菜種
大豆油	大豆
とうもろこし油(コーン油)	とうもろこし胚芽
綿実油	綿花の種子
べに花油(サフラワー油)	べに花の種子
ごま油	ごまの種子
こめ油	米ぬか
ひまわり油	ひまわりの種子
オリーブ油	オリーブの果肉
パーム油	アブラヤシの果肉

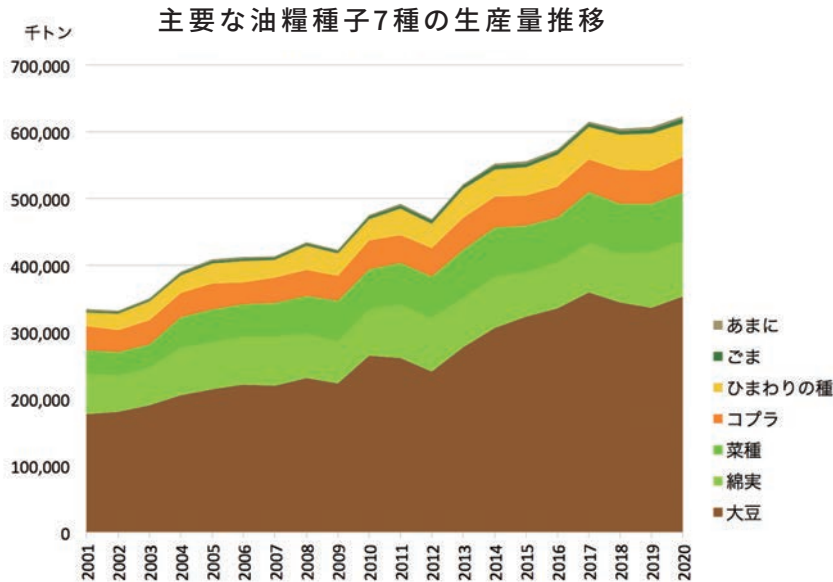


(出所) 農林水産省、財務省、日本植物油協会 各種データより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

(出所) 日本植物油協会ウェブサイトより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

世界の原料油糧種子生産量

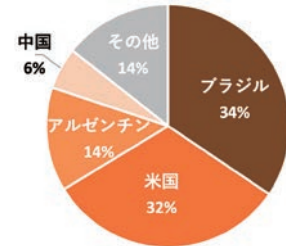
- 植物油は果肉から搾油されるもの（パーム等）と、油糧種子から搾油されるもの（大豆、菜種等）に分かれ、主要な油糧種子の生産量を見ると、大豆生産量が多いです。
- 植物油原料生産国には偏りがあり、例えば、世界全体生産量の内、大豆は上位4カ国で9割弱、菜種は上位5カ国で7割弱を占めている現状です。



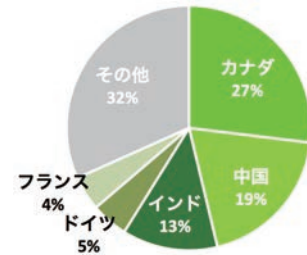
(出所) FAOSTATより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

主要な油糧種子の
国別生産比率(2020年)

大豆：約3億5千万トン

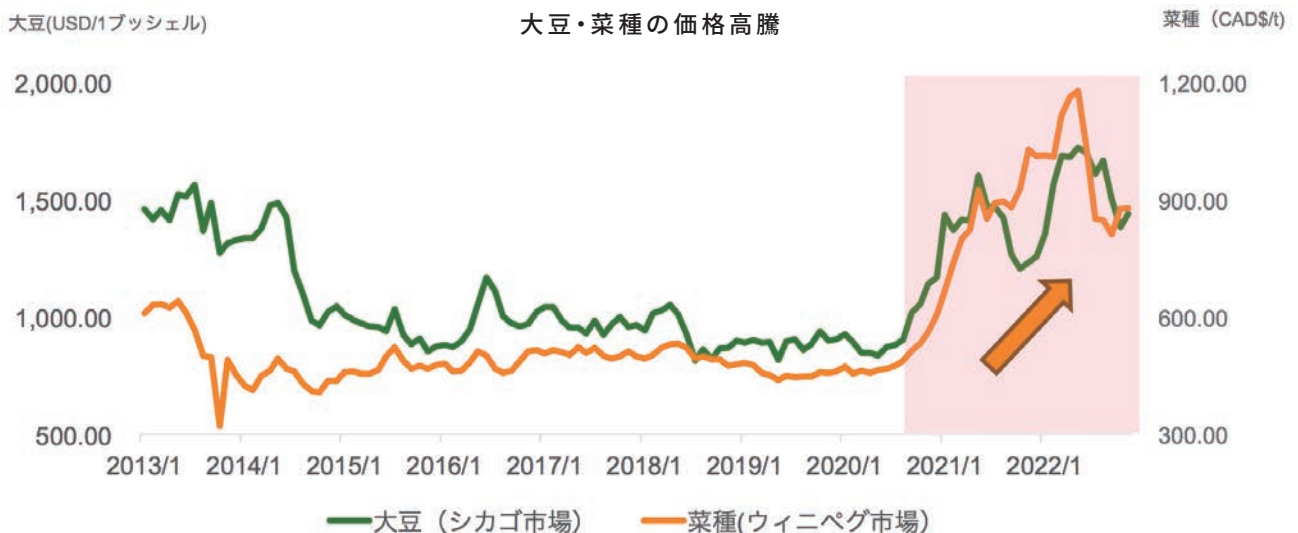


菜種：7千万トン



原料の価格動向

- 植物油の原料である油糧種子の価格は、ここ数年高騰。例えば、日本で消費量の多い大豆・菜種では、2020年後半から大幅に値上がりしています。
- 価格の高騰には、気候変動の影響を受けた不作や、新型コロナウイルス蔓延による影響、ウクライナ侵攻等の政治的要因、サステナビリティ対応によるコストアップ、バイオ燃料等の需要の増加、土地や労働力の制限による生産の限界等、様々な要因が複雑に絡み合います。
- 原料を輸入に頼る日本は、価格高騰の影響を受けやすい状況。油は多くの食品に利用されており、食事に欠かせず、油の価格高騰は私達の食卓に大きな影響を及ぼします。



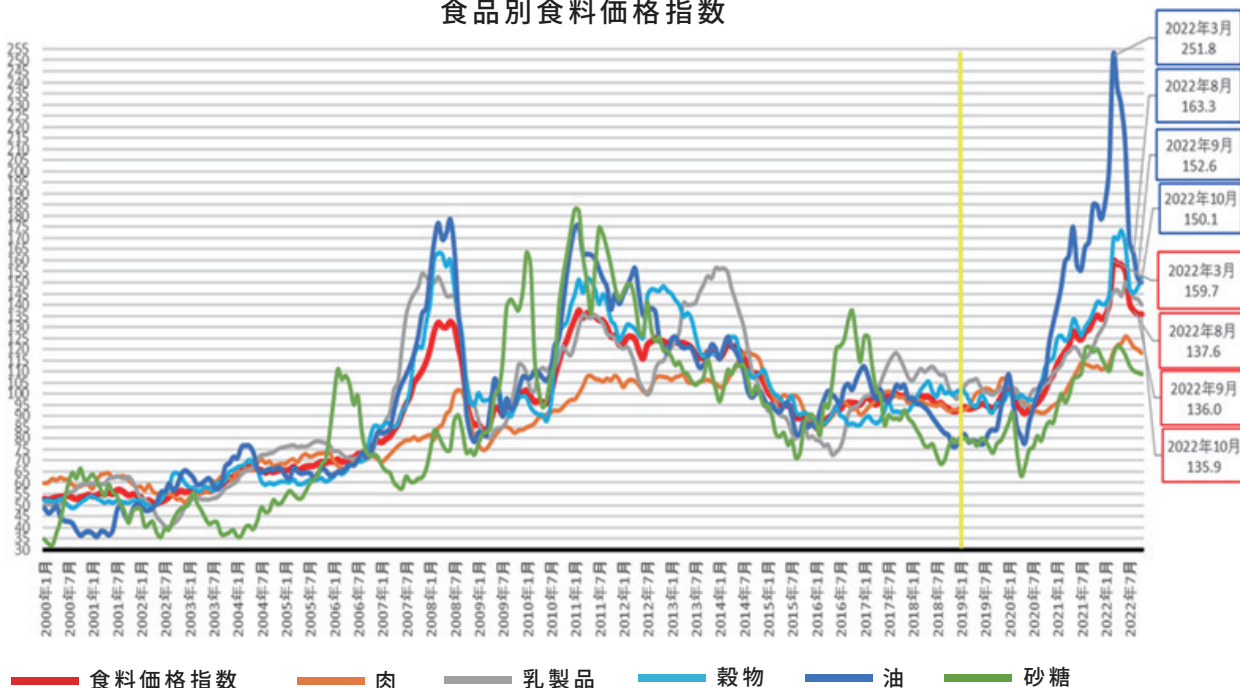
(出所) 日本植物油協会 植物油の道、Canola Council of Canada ウェブサイトより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

植物油価格

国際的な食料価格の変化

- 国連食糧農業機関(FAO)は植物油など主要5品目で構成される世界食料価格指数*(FFPI)を毎月公表
- 植物油が牽引する格好で上昇し、2022年3月251.8の歴史的水準となった後150台に低下。しかし、現状でも2014~16年の平均(=100)より5割程度の高止まりになっています。

食品別食料価格指数

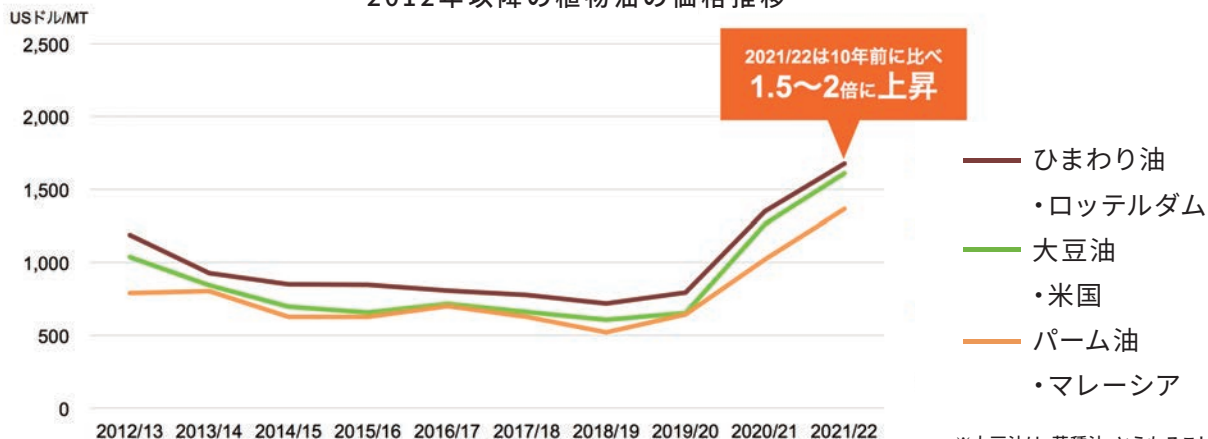


(出所)FAO食料価格指数より 日本植物油協会作成

国際的な植物油価格の変化

- 近年、国際的に植物油価格が上昇。現在の取引価格は10年前と比較して概ね1.5-2倍にまで上昇
- 植物油原料を輸入に頼る日本は、世界の植物油取引価格の影響を大きく受けます。

2012年以降の植物油の価格推移



(出所)USDA FAS, "Oilseeds: World Markets and Trade", 2022年10月より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成。

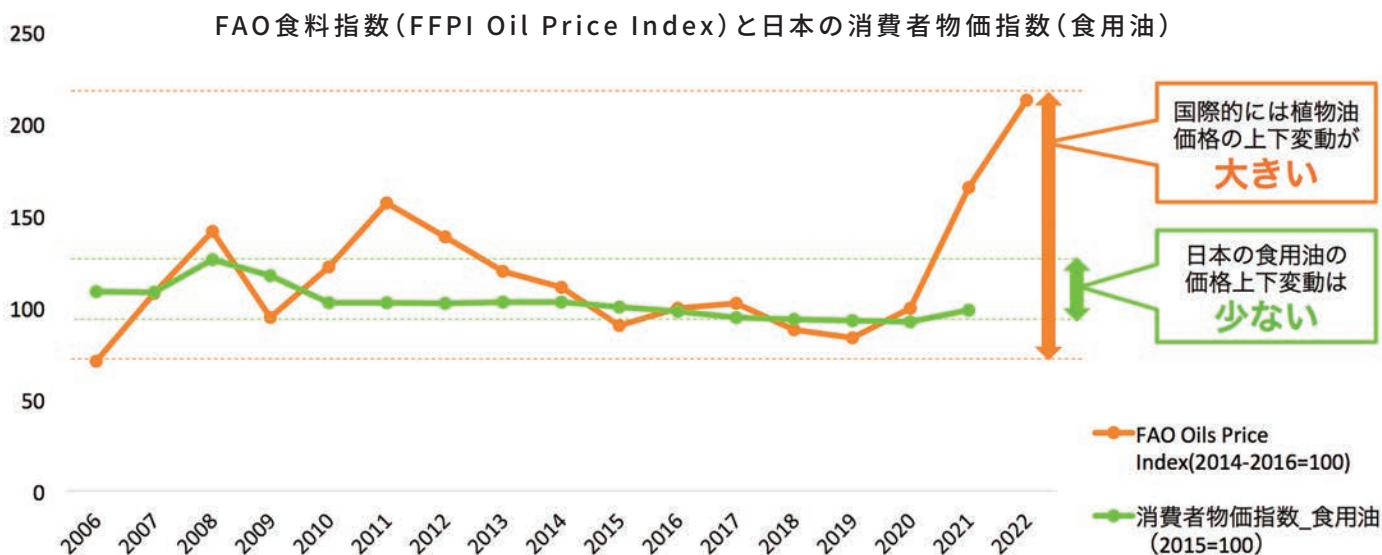
なお、各植物油の価格推移の出典は以下の通り

Soy bean-U.S. Decatur; Average wholesale Tank crude; USDA
Sun seed-Rott EU FOB NW Euro; Oil World

※大豆油は、菜種油、とうもろこし油、綿実油の取引時の基準にもなる。

日本と世界の食用油価格推移

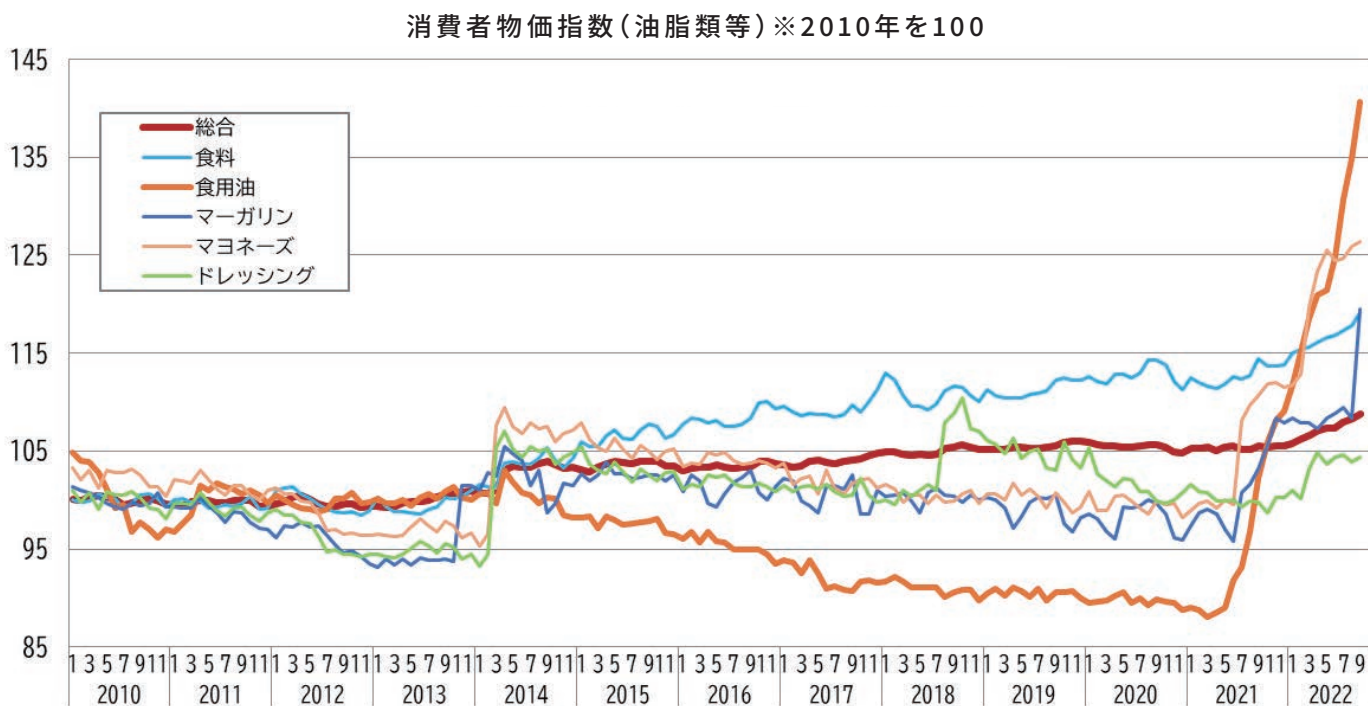
- 国際的には近年植物油の値上がりが継続。過去を振り返ると海外では大きく価格が変動。
- 一方、日本の「食用油」の消費物価指数を確認すると、それ程大きな変動は発生していません。これは日本の企業努力により、安定した価格での提供に努める動きが進められてきた事が要因と推測されます。



(出所) FAO, Food Price Index、総務省、「2015年基準 消費者物価指数」より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

日本の消費者物価(食料、食用油他)推移

- 原材料コストの高騰、物流費やエネルギー、円安により植物油コストが急激かつ大幅に上昇しており、製品の安定供給の維持の為に、製品価格を改訂せざるを得ない状況にあります。



(出所) 政府統計ポータルサイト「消費者物価指数」より 日本植物油協会作成

植物油(食用油)を取り巻く需給構造の変化と価格変化

植物油の需給構造の変化

日本では、菜種、パーム、大豆、こめ、コーン、オリーブ、ごまの他、多くの植物油が用途に合わせて消費されています。日本の油脂供給量の約4割を占め、家庭用として最も多く使われている菜種油(キャノーラ油)を例に需給構造を見てみましょう。

- 菜種油の原料菜種は、日本では年間4千tの生産しかなく、年間に搾油される菜種のほぼ100%をカナダと豪州からの輸入に頼っています。
- 2021/22年の世界の菜種の生産量、輸出货量、輸入量は右の表に示す通りであり、世界の菜種輸出货量の90%以上をカナダ、豪州、ウクライナ(青枠部分)で占めています。

世界の菜種 (2021/22年) (千t)

	生産量	輸出货量	輸出割合	輸入量
EU	17,216	425	2%	5,571
中国	14,714	0	0%	1,657
カナダ	13,757	5,268	38%	105
豪州	6,762	5,300	78%	1
ウクライナ	3,015	2,703	90%	12
米国	1,244	128	10%	492
日本	4	0	0%	2,116
その他	17,240	837	5%	4,067
総計	73,952	14,661	20%	14,021

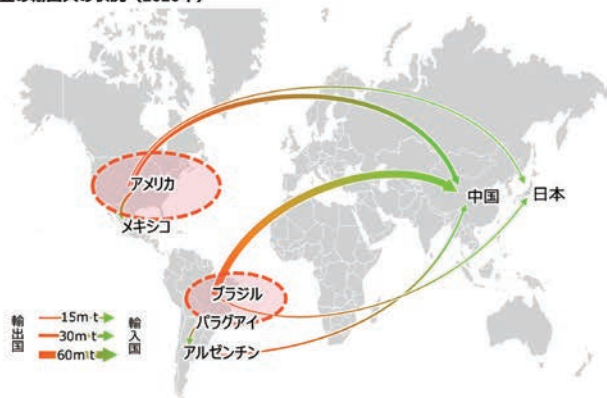
(出所)米国農務省「Oilseeds:World Markets and Trade」より 日本植物油協会作成

植物油原料調達先の確保及び多様化

- 主要な植物油原料のうち、日本国内で多く生産されている植物油原料は大豆と菜種です。しかし、国内での大豆、菜種の生産量は需要量に対して決定的に不足しており、植物油の自給率は4%程度といわれています。
- 原料の多くを輸入に頼る日本では、他方で植物油の需要量が一定量存在します。輸入量も多く、輸入先の偏りも存在するため、日本の植物油原料調達における課題は、調達先を如何に確保するか、またそれらを如何に多様化させていくか、という点です。

日本の大豆輸入先国

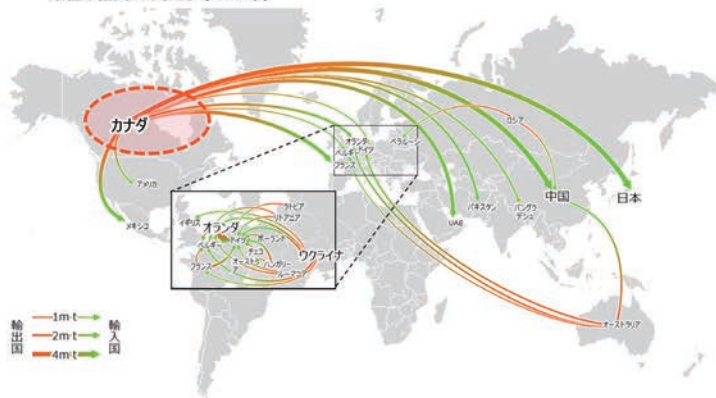
大豆の輸出入の状況 (2020年)



日本は大豆の約75%をアメリカから、約14%をブラジルから輸入

日本の菜種輸入先国

菜種の輸出入の状況 (2020年)

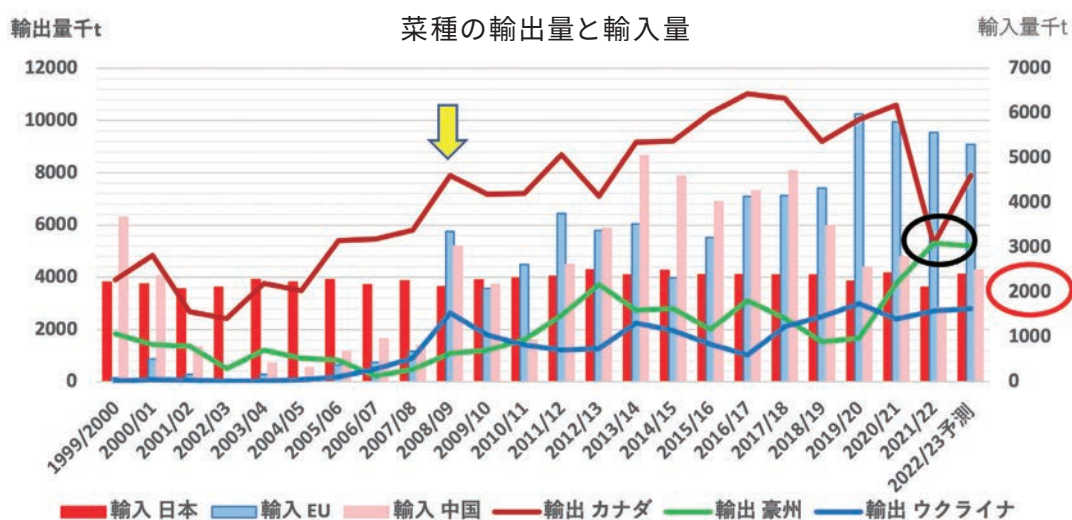
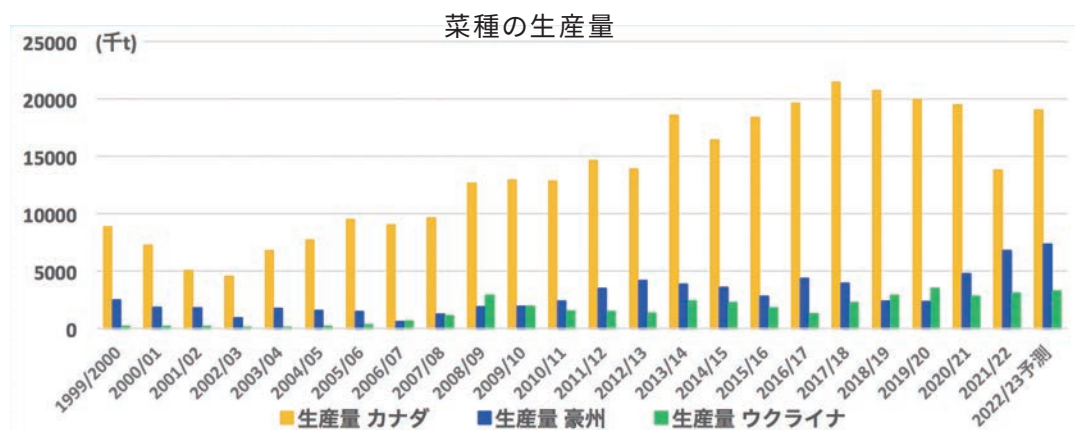


日本は大半をカナダから輸入

(出所) CHATHAM HOUSE「Resource Trade.earth」及びFAOデータより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

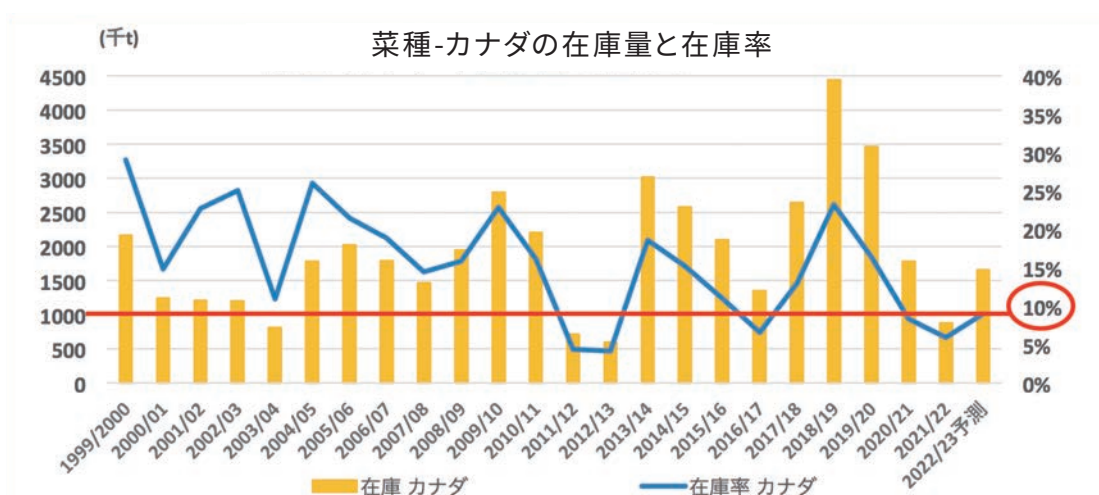
菜種の生産量推移 2021年産大幅減産除き近年は一定の生産量

下図の菜種の輸出入推移から分かる様に、日本(赤の棒グラフ)は約2,000千tを2000年以前からコンスタントに輸入していますが、2008年頃(黄色矢印)よりEU、中国他の輸入量が増えています。EUと中国などの輸入量の増加に伴い、カナダの生産量も順調に増加してきましたが、2021年は、未曾有の天候(高温乾燥)により、過去15年間で最低の生産量となり、輸出货量もピークの半分以下(下図の黒丸)に落ち込みました。



(出所)米国農務省「Oilseeds:World Markets and Trade」より 日本植物油協会作成

菜種の需給推移 近年主産国カナダで逼迫化が進む

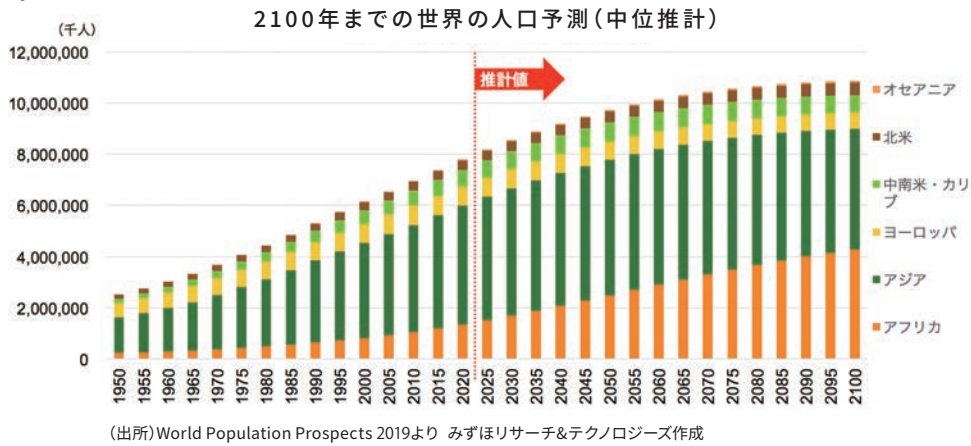


(出所)米国農務省「Oilseeds:World Markets and Trade」より 日本植物油協会作成

植物油高騰の原因 ①

人口増加による需要の増加

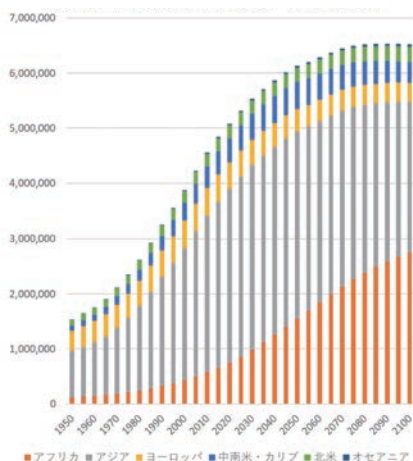
- 人口の変化は食用植物油の需要に影響します。国連の「世界人口推計2019 (World Population Prospects 2019)」によると、2030年の世界の人口は85.5億人、2050年は97.4億人、2100年は108.8億人と推計されています。
- 2020～2050年の間、人口増加率は世界全体で4.0%、アジアは2.6%、北米は2.5%の伸びと予測されていますが、アフリカは11.2%と大幅に増加する見通しです。日本では人口は減少していきますが、世界人口は増加し一層食料需給が逼迫する懸念があります。特に、新興国において植物油の需要が高まる可能性があります。



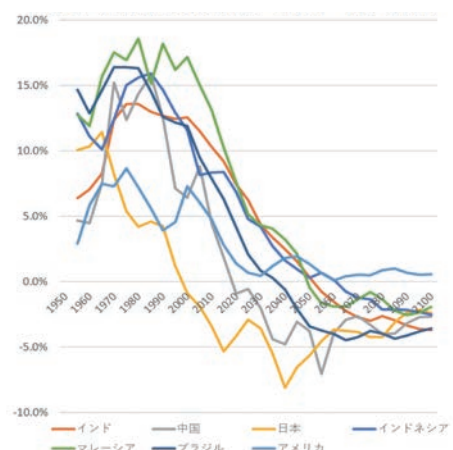
生産労働人口の不足

- 生産年齢人口(15～64歳)の変化は植物油原料の生産に影響します。国連の「世界人口推計2019 (World Population Prospects 2019)」によると、2030年の世界の生産年齢人口は55.3億人、2050年は61.3億人、2100年は65.2億人と推計されています。
- 主要国の生産年齢人口増加率をみると各国とも減少傾向になると予測されています。マレーシアやインドネシア等のパーム油の生産国でも、将来的には収穫作業等の外国人労働者が不足し、生産量に影響を及ぼす可能性があります。

世界の生産年齢人口の推移 (中位推計)



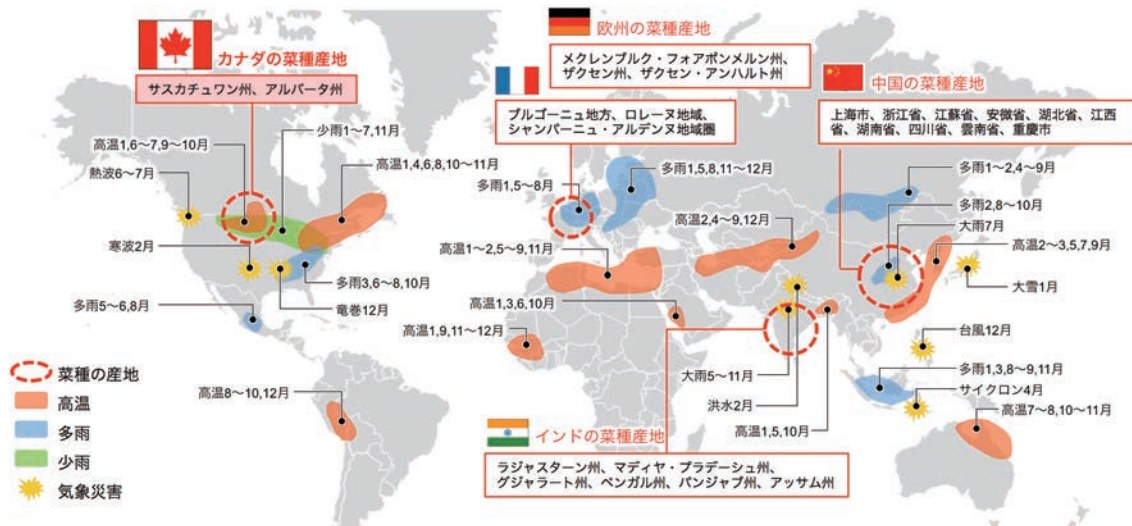
世界の生産年齢人口増加率の推移 (中位推計)



異常気象による収穫量の減少(菜種)

- 気温や降雨量の急激な変化は、植物油原料の生産量に大きな影響を与えます。2021年6月下旬は、カナダ中西部~米国北西部で異常な高温が続き、カナダ西部のリットン(Lytton)では、6月29日に最高気温49.6℃を記録して、カナダにおける最高気温の記録を更新しました。
- カナダにおける菜種の生産地は中~西部のプレーリー(平原)地帯。異常高温影響で、2021年のカナダ産菜種は例年になく油分が低く、油の取れる量が悪化した為、生産コスト上昇をもたらして菜種油の取引価格が高騰しました。

世界の主な菜種生産地と異常気象の発生地域(2021年)

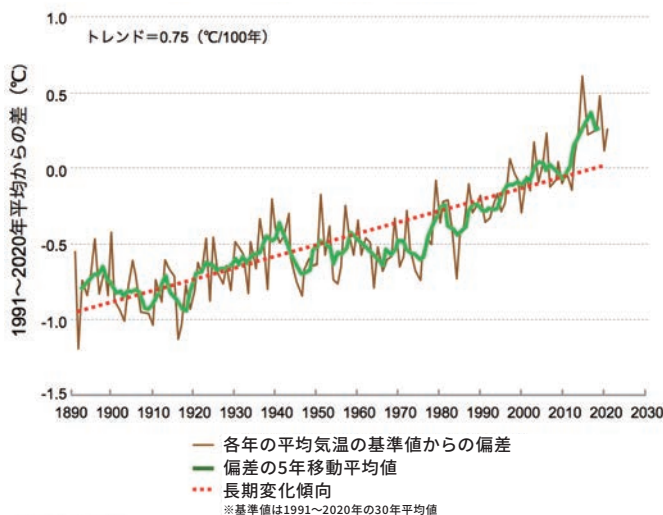


(出所)2021年世界の主な異常気象・気象災害より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

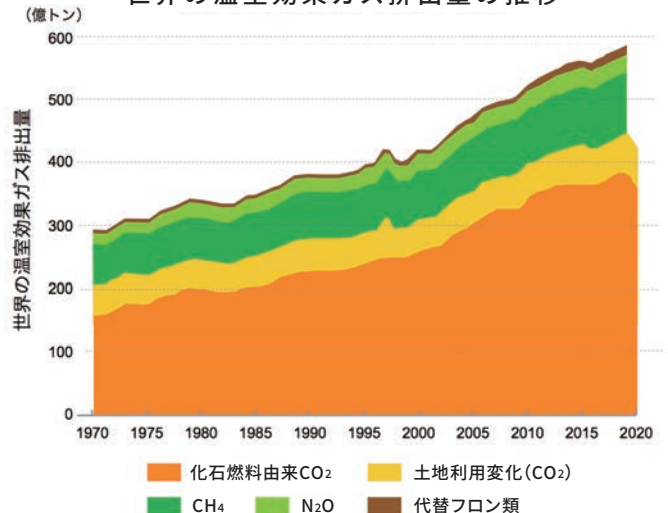
気候変動の見通し 温暖化と温室効果ガス排出量

- 2021年12月の世界の平均気温の基準値(1991~2020年の30年平均値)からの偏差は+0.26℃で、1891年の統計開始以降、3番目に高い値になりました。
- 国連環境計画(UNEP)の「Emissions Gap Report 2021」によると、2019年の世界の人為起源の温室効果ガスの総排出量は全体で約581億トン。前年から5.4%と今までになく減少しましたが、2021年には強いリバウンド傾向が予測されています。
- この様な慢性的な気候変動リスクの出現が、温室効果ガス排出抑制としてバイオマス燃料が注目される背景となっています。

世界の12月平均気温差



世界の温室効果ガス排出量の推移



(出所)環境白書、循環型社会白書、生物多様性白書(R3,R4年度版) 各種データ

植物油高騰の原因 ②

急速な円安の進行

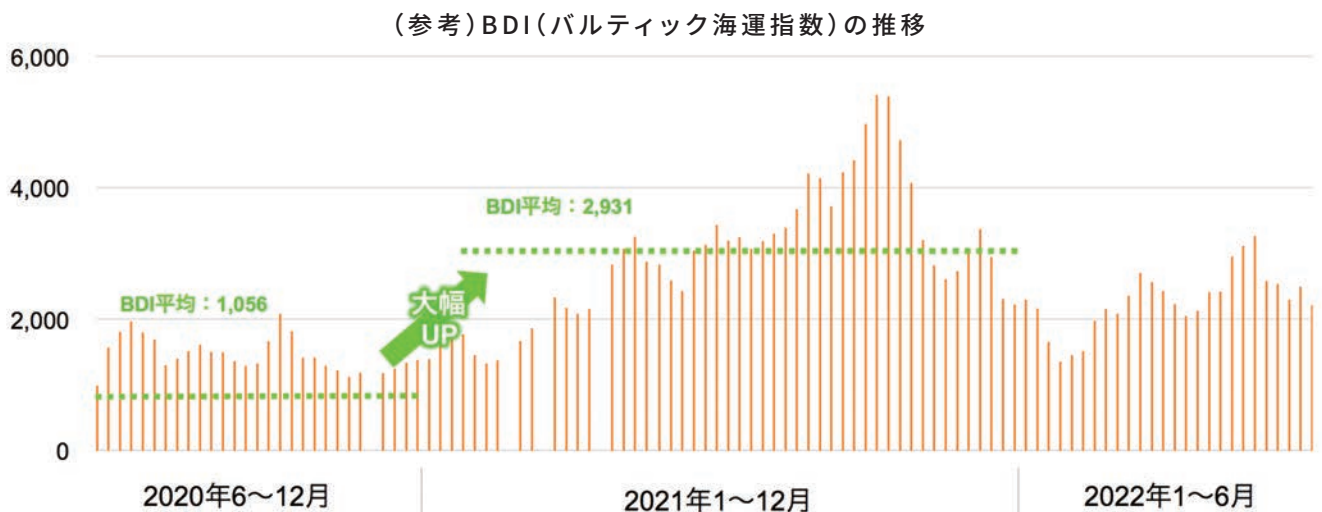
- 円・ドルの為替相場の直近10年間の変動を見ると、110円を挟んで比較的安定していたが、2022年に入り急速に円安が進行。原料を輸入に依存する日本は、調達価格上昇に繋がり非常に厳しい状況です。



(出所) 日本銀行, 主要時系列統計データ表より 為替相場(東京インターバンク相場)東京市場ドル・円スポットみずほリサーチ&テクノロジーズ作成

原料輸送費の上昇

- 植物油や、油の原料は基本的に貨物船で海上輸送しています。
- 新型コロナウイルス影響により海運の混乱は続いており、輸送遅延も世界各地で発生。海運の混乱に伴い、2021年は海上運賃も高騰。海上輸送運賃動向を示す指数バルティック海運指数(※対象は乾貨物)も大きく変動。2019年にはBDI平均1,341、2020年1,056、2021年は2,931と2倍以上も上昇しました。
- 海上運賃の高止まりが続けば、販売元の企業では対応できず販売価格に一部上乘せが予想されます。

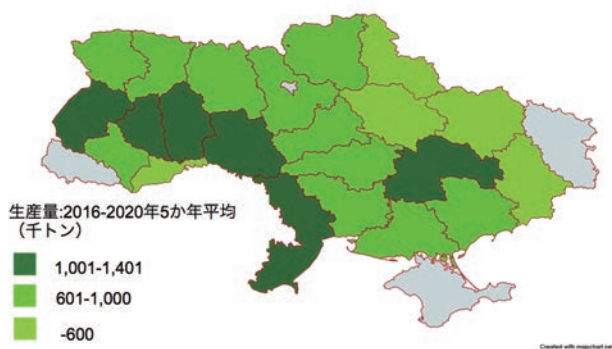


(出所) Ocean Freightより みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

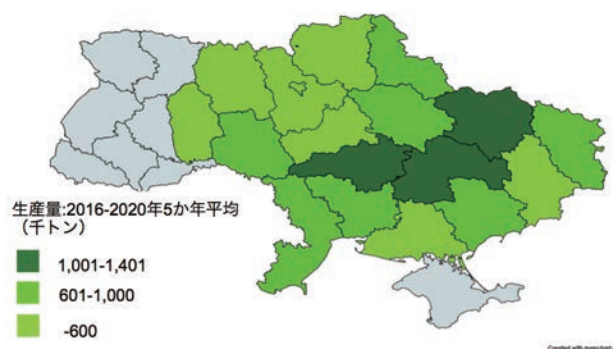
ウクライナ情勢による油脂原料供給不安

- ウクライナは、植物油原料の菜種や大豆、ひまわりに加え穀物生産量も多く、国際的にみて主要な植物油原料生産国の1つ。その為、域内生産が出来なくなる事態が発生すると、同国内だけでなく、世界の流通にも影響を及ぼします。
- ウクライナと隣接するロシアでも、ひまわり、菜種の生産シェアが大。ひまわりは、両国で世界の半分の生産量。また、菜種は、両国で世界の生産量の5%を占めます。
- ロシア・ウクライナ衝突により輸出が出来ない事態が生じると、世界の植物油の供給バランスが崩れる事が懸念されました。
- ロシアと国境を接するウクライナ東部がひまわり生産が盛んな地域である為、2022年2月発生のロシアによるウクライナ侵攻影響で、ひまわり油の供給不足が懸念されました。

ウクライナにおける菜種の栽培地域

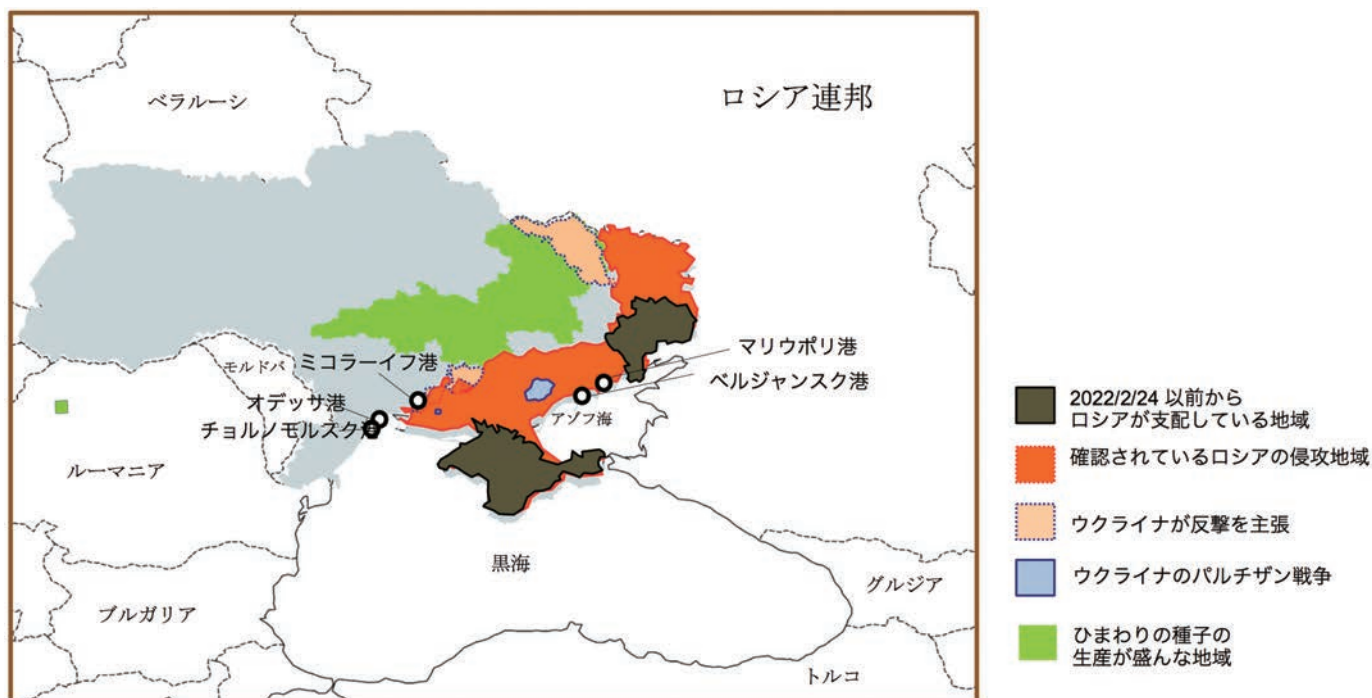


ウクライナにおけるひまわりの栽培地域



(出所)USDA FAS,"Ukraine, Moldova and Belarus - Crop Production Maps"より みずほリサーチ&テクノロジー作成

- ロシアによるウクライナ侵攻では、ロシア軍による黒海封鎖を受けて、黒海沿岸のウクライナ主要港からの輸出機能が、約半年近く停止。その間、陸路輸出や周辺国協力を通じた輸出等を模索も、主要港の取扱量をカバー出来る程ではなく、7月末に輸出が再開される迄、ウクライナからの輸出量は大きく減っています。

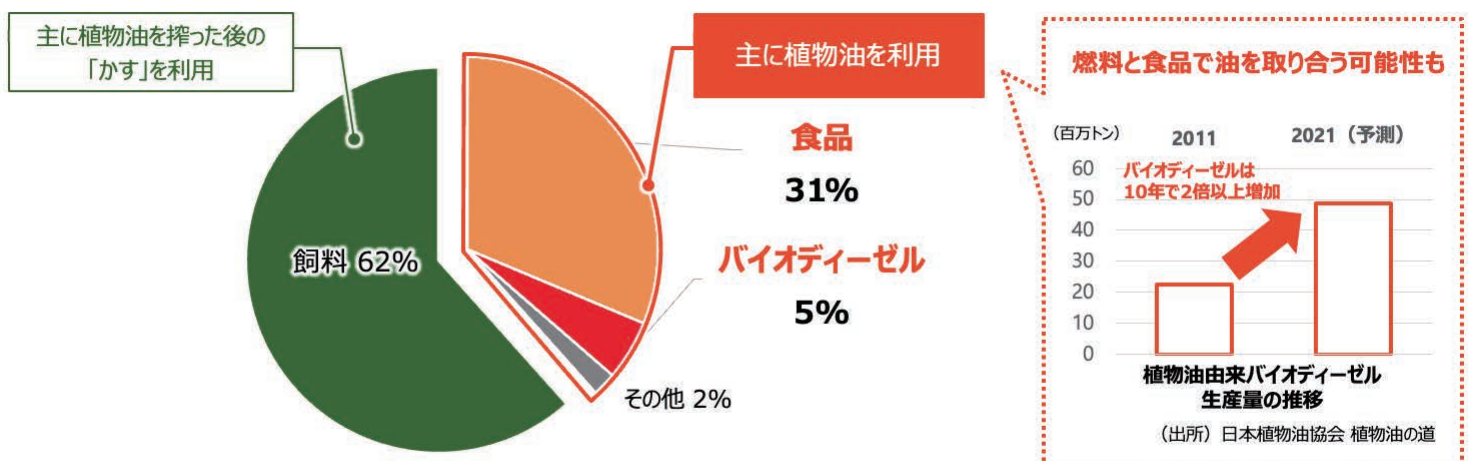


(出所)戦禍の状況については、2022年10月25日時点のデータ出典、Institute for the Study of War, Interactive Map:Russia's Invasion of Ukraineより みずほリサーチ&テクノロジー作成

植物油高騰の原因 ③

植物油とバイオマス燃料

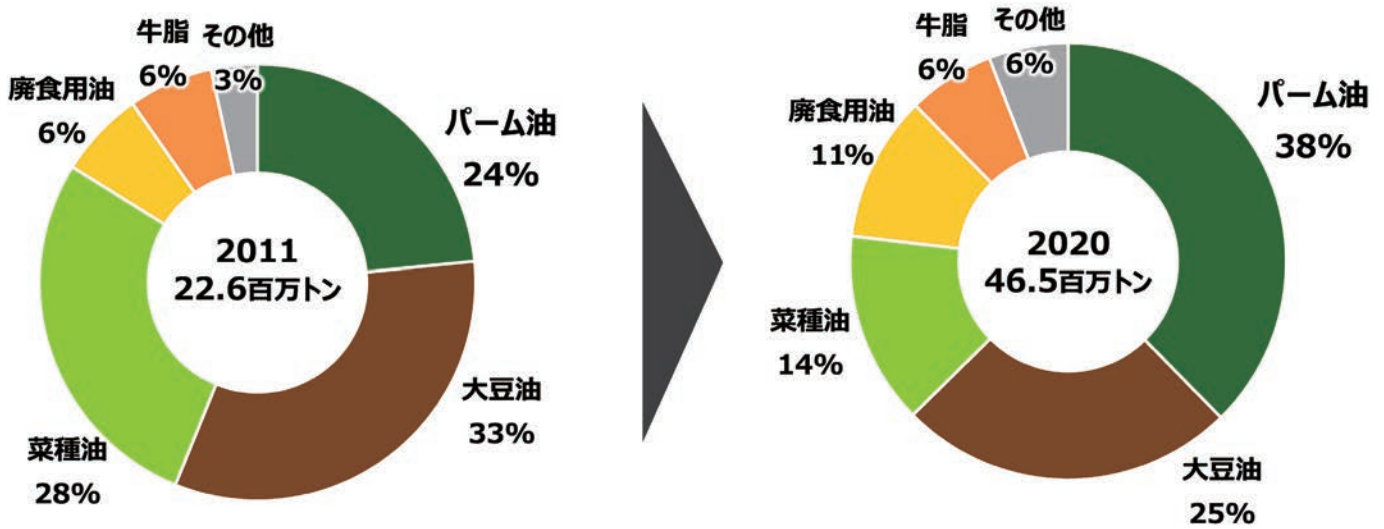
- 植物油は油糧種子(大豆、菜種等)を搾油する(圧力をかけしぼる又は溶剤抽出)ことにより作られますが、同時に油の搾りかす(油糧種子かす)ができます。このとき残った搾りかすは「ミール」と呼び、たんぱく質を多く含んでおり、主に家畜の飼料として利用されます。例えば油糧種子の中で生産量が最も多い大豆では、油よりも搾りかすの方が重いいため下表のような重量の用途別では飼料の割合が大きくなります。
- バイオディーゼルは、植物油を原料としたバイオマス燃料です。油糧種子の利用用途に占める割合としては5%程度に留まっていますが、食品同様植物油を原料としている為、影響は小さくありません。化石燃料と比べ環境に与える影響が少ない事からバイオ燃料の需要は増加しており、ここ10年で生産量は2倍以上に増加しています。世界の油糧種子の生産量が限られる中、食品と競合してしまう可能性も考えられます。



(出所) 世界:UFOP supply report 2020/2021より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

- バイオ燃料は大きくバイオエタノール、バイオディーゼルに分けられます。そのうち、植物油が使われるのはバイオディーゼルです。バイオエタノールは、サトウキビやトウモロコシ等から作られています。
- 世界全体でみると、現在、バイオディーゼル原料は構成比が高い順にパーム油、大豆油、菜種油、廃食用油、動物油(主に牛脂)が利用されています。2011年と比較すると、バイオディーゼルの生産量は2倍以上増加しています。
- バイオディーゼル原料は、各国で生産できる作物や情勢によって異なります。一般的には、自国で生産できる作物を原料として用いる事が多くあります。例えば、パーム生産国であるインドネシアではパーム油を原料としてバイオディーゼを生産しています。大豆生産国であるブラジルや米国でも同様です。ヨーロッパではEU域内で生産した菜種油やひまわり油を活用する他、不足分はパーム油を輸入して補っていましたが、食用で使用するパーム油の使用に替えて使用済みの食用油(廃食用油)を選択しています。日本では、主に使用済となった油(廃食用油)を活用しています。

バイオディーゼルに使用されている植物油の内訳

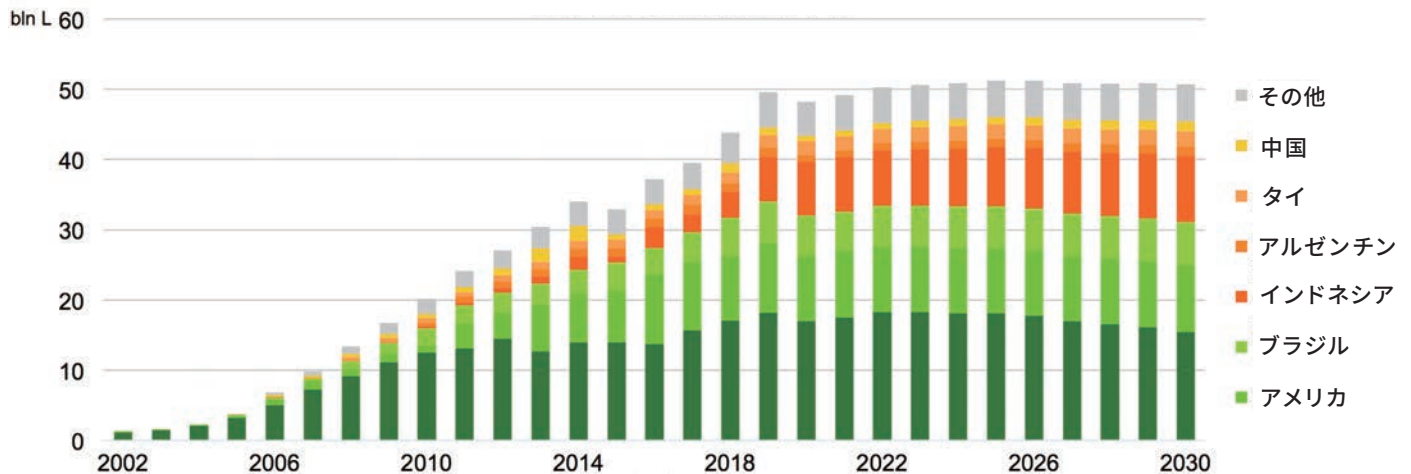


(出所)日本植物油協会 資料集(データ集)より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

バイオマス燃料の消費量

- 国際連合食糧農業機関(FAO)によると、世界全体のバイオディーゼル需要は2030年迄ほぼ横這いとなる見通しです。
- 一方、持続可能な航空燃料(SAF)の原料としての需要の高まりや、米国における自動車へのバイオエタノール配合割合の引き上げ等、近年の傾向から今後燃料としての需要が拡大していく可能性があります。

世界におけるBDF消費量の予測

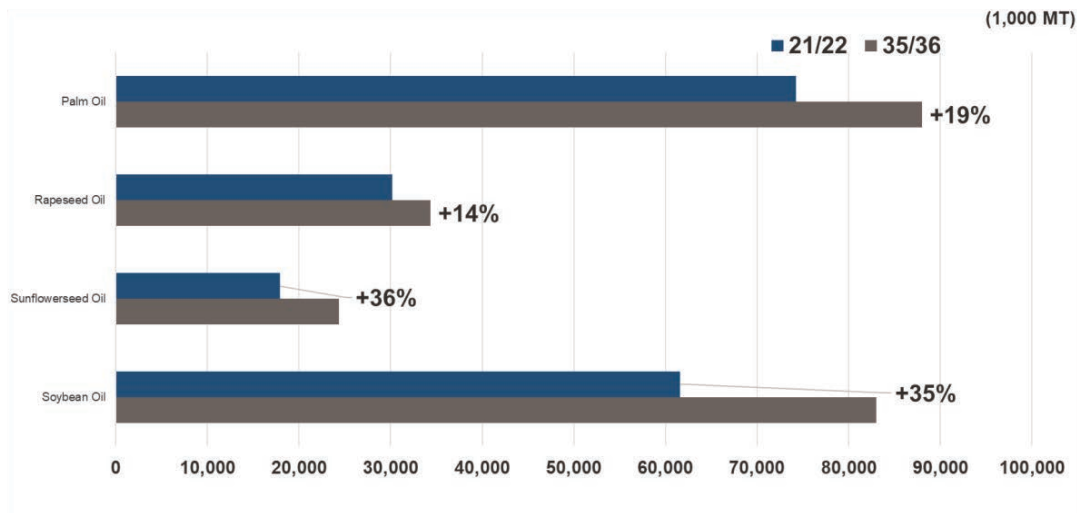


(出所)OECD-FAO Agricultural outlook 2021-2030より みずほリサーチ&テクノロジーズ作成

植物油の未来

植物油や原料への需要、価格水準等について

- ① 長期的な需要予想として、今後15年間、世界的に食用や燃料用等の強い需要が、大豆油、パーム油、菜種油、ひまわり油等に発生するとの見方があります。(アメリカ大豆協会セミナー2022.7.12情報)



- ② 現状の植物油需要の高まりから、世界的に植物油の価格が構造的に高止まりする可能性はあります。増加の程度には幅があるでしょうが、今後も植物油需要は増加を続けていくでしょう。

- ③ 植物油原料の生産拡大が需要に応じて進む事が期待されますが、拡大スピードや数量が需要増を大幅に上回らず、現状の需給逼迫が更に悪化する事も起こり得ます。また一時的に逼迫状態が緩和しても強い需要に支えられ、世界的には植物油原料や植物油は価格的には高位水準を維持すると思われます。

海外から植物油原料や植物油の原油を輸入し、植物油製品を生産、供給している日本。これらの想定される未来に対して、国内の植物油メーカーは、生活に不可欠な植物油を安定的に供給し続ける為に、以下の取組を行っていきます。

- ① 安定的な供給の為に、世界的な植物油の需要増を基盤にした価格で輸入、調達をして、良い品質の製品を販売していく事業構造に変化はないと思われます。
- ② これまで同様、植物油の品質の向上及び安定、植物油の美味しさを生かす利用法の提案(揚げる、和える、練り込むに加え、かける等を提案)や商品開発に努めていきます。
- ③ 地球環境に対する様々な社会的要請、植物油の使用期間の延長技術、脱炭素燃料化への取組、包装容器の改善、標準化の追求等による物流改革、企業間連携による最適サプライチェーンの創出等を含め、更なる生産性向上やサステナビリティ確保への努力を継続します。

以上

一般社団法人 日本植物油協会

〒103-0027 東京都中央区日本橋3-13-11

油脂工業会館6階

TEL.03-3271-2705 (代表)

<https://www.oil.or.jp/>

油糧輸出入協議会

〒103-0012 東京都中央区 日本橋堀留町1-10-14

いちご人形町ビル9階

TEL:03-3662-9821

<https://www.jofiea.gr.jp/>